



コープの指定産地米 佐渡編 産地訪問紀行 vol.4



7月28日(木)～29日(金)、コープの指定産地米CO・OP新潟佐渡コシヒカリの産地を、組合員2人が訪問しました(コープかながわ鈴木みや子さん、コープしずおか森嶋麻衣子さん)。

現地ではJA佐渡の渡部さんと生産者の大井克巳さん、佐々木邦基さんから、「生き物をはぐくむ農法」の取り組みについて聞きました。また、水田内の生き物の生息場所である「江(え)」や魚道を実際に見てきました。

JA佐渡 CO・OP 新潟佐渡コシヒカリ

《CO・OP 新潟佐渡コシヒカリの産地情報》



CO・OP新潟佐渡コシヒカリのふるさとは、日本最大の島、佐渡ヶ島です。北の大佐渡山地、南の小佐渡山地の間に広がる国仲平野で、米作りが盛んに行われています。

佐渡は日本最後の野生のトキの生息地でした。現在は、トキの野生復帰の取り組みがすすめられています。現在、約30羽のトキが佐渡の空を羽ばたいています。

佐渡市独自の「朱鷺(トキ)と暮らす郷(さと)づくり」認証制度が行われており、2011年には日本初のGIAHS(世界農業遺産)にも登録されました。

「朱鷺(トキ)と暮らす郷(さと)づくり」 認証で佐渡の米作りが変わりました

JA佐渡では、平成20年からトキとの共生をめざした「朱鷺(トキ)と暮らす郷づくり」認証制度が始まりました。米の栽培基準(化学合成農薬、化学肥料の削減)に加え、田んぼに暮らす生き物のことも考えた「生き物を育む農法」による栽培は、佐渡コシヒカリ作付面積のおよそ50%にまで広がってきました。多くの生物との共生をめざした「生物多様性の取り組み」では、田んぼの生き物を調べる「生き物調査」や生物の生息場所を確保する取り組みが行われています。



JA佐渡 米穀販売課長補佐 渡部 学さん



お米の生産者 4645世帯
コシヒカリについて(平成23年度)
◆作付面積…4330ヘクタール
◆コシヒカリのほか「こしいぶき」
なども栽培



森嶋さん(左)と鈴木さん

農薬も肥料も、稲の育ちを見て タイミング良く使います

米作りでは化学農薬は3割減または5割減での栽培をすすめています。肥料も、有機肥料と化学肥料をうまく組み合わせて、減化学肥料栽培を行っています。肥料は、稲の色を見ながら加減します。生産者の腕の見せ所ですね。



葉の色が薄いのは肥料が不足しているということ、色が濃い時は肥料を控えます。

米作りは水の管理が大切です。田んぼに毎日通い、暑さ、寒さにあわせてこまめに管理しています。

生産者 佐々木邦基さん

生きものを育む(はぐくむ)農法 ～「江(え)」は田んぼの生きものの生息場所～

この水たまりが「江(え)」なんです。

ドジョウがいっぱいいるわよ!



田んぼの横に掘られた「江(え)」は、夏場の中干し(田んぼの水を抜き稲の根に酸素を供給する)時や冬場にはドジョウなどの逃げ場所になります。

田んぼに江(え)をつくるということは、米の栽培面積が減るということですが、減反ということもあり設置しました。

田んぼの生きものに関心がいくようになりました。「生きものを生かすために農薬をどう使うか」という目線に変わったと感じています。

長畝生産組合 大井 克巳さん



<産地訪問を終えて>

米作りもさることながら、「朱鷺と暮らす郷づくり認証」に始まり多様な生きものとの共生実現のために、休耕田や稲刈り後の田んぼに水をためたり、魚道を作ったり、ピオトーブ設置などなど、そしてあぜ道の環境への配慮のため人力で草刈り(農薬は使わない)など、目をみはるものはかりました。(鈴木みや子さん)

実際に見た佐渡の土地は、空気がきれいで、沢山の生きものがいて、豊かな環境で、この土地で育ったお米は絶対においしいに違いないと確信できますよ!(森嶋麻衣子さん)



江(え)で見られた生きもの
(左から)ドジョウ、ミズカマキリ、マツモムシ。